



## -第12話 スクールカウンセラーを始めた頃-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんなで楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

さて、自分が記事を書き始めて、12回目です。毎回、何回目だ、よくやってきたなどと自分で自分を褒める書き出しで申し訳ない。そうでもしないと、書き始められないのです。書くこと自体は、楽しいのだけど、やはりテーマが底をついてくる。テーマさえあれば、どこまでも書けるなどとは言いませんが、書くべきテーマさえ見つければ、出てくる言葉を紡いで最後まで到達は可能なのぐらいの内容は担保できてるかと思えます、自分の場合は。

少し横道に逸れます。文章作法についてです。先程も書いたように、文章を書くこと自体は、本来好きな作業のようです。遡れば、小学校の夏休みの宿題で、読書感想文の時代のことになりますが、この頃書いたものが、自分の基本になっているような気がします。うちの父親は、小学校の教師をしておりまして、仕事柄、私の宿題にも口を出してきました。母親によれば、自分の教え子には丁寧、親切、熱心な人だということでした

が、自分の子どもには、いらちの面が出てしまい、教え子に対してほどの懇切丁寧さがなかったと、ぼやいていたように思います。だから、読書感想文にも、口は出してくるのですが、自分の思うような趣旨の感想文に導いていく感じでした。確かに父親と一緒に考えてくれる文章は、その通りだと思うのですが、後から、これは僕の感想？僕ってこんな感想持ってたっけ？と思うこともありました。そこは、父親も教師なので、うまく自分の息子をそこにはめ込むスキルには長けていたのかもしれませんが。最終、納得してしまうのですが、父親の掌の上で、書かされた感想文と言えなくはないかと今思い返したりします。父親の本棚にあった夏目漱石や、宮澤賢治が、コドモゴコロに良きもの、尊きものであるという刷り込みは、確実にこの頃からスタートしたものだと思っています。文学や文章が好きなのも、父親譲りなのだと思えながらに思いますし、うん十年後かに対人援助マガジンの執筆者の一

人となっていることを思うと、やはりまんまと父親に嵌められたのかもしれませんが。早いもので、その父親も亡くなって9年目となります。

## 1. スクールカウンセラーとして、出会う子どもたち

大学の教員をしながら、スクールカウンセラーをしています。一応、臨床心理学の特任教授となっておりますので、その臨床現場としてスクールカウンセラーをやらせてもらっていると人には説明しています。もう、10年になるので、スクールカウンセリングの現場のことはあまり分かってませんなんて言い訳は通用しません。でも、今だにスクールカウンセラーの仕事を明確にお伝えすることは下手です。本日は、学校臨床とは何かとか、スクールカウンセラーは如何にあるべきかなどといった話は、一切しません。カウンセラーであろうと、臨床心理士であろうと、公認心理師であろうと、はたまた街角の占い師であろうと、出会うのは、人です。その人が、大人であろうと、子どもであろうと、母であろうと、父であろうと、息子であろうと、娘であろうと、悩み事にあまり差異はないなと思います。これは、人の悩みなんて、所詮は十把一絡げであるなんてことを言いたいわけではありません。でも、事柄からすると同じような悩みに見えるという事です。「人間関係」にどうしても集約される、そんな感じです。逆にカウンセラーから見ると、同じような困り事も、ご本人にすると唯一無二なんだなと思います。困り事なので、当の本人は、そんなものは早くどっかへ行ってしまえってなものでしょ

うが、早くうっちゃろうとすると、逆にまわりついてくる。良い方に向いてきた生徒さんや、お母さん、たまにお父さんの話なんかでは、「相変わらず困ってますけど、いい事もありまして」とか、「あんまり変わんないけど、最近ちょっとマシですかね」とか、こんな話が出てくると、カウンセラーも、おっとなります。潮目が変わるといのでしょうか。そういう会話に出くわすと、こちらのスイッチも押される気がします。解決の具体的な形は、以上のような会話に含まれて現れるというのが実感としてあります。もちろん「あの悩みより、もっとたいへんな事が起きまして」という変化もありですよ。

### ① 新米スクールカウンセラーがクライアント（子ども）に助けられた話

うまくいったケースの話も良いのですが、くれぐれも自慢話にならないようにしないといけないと、常日頃から思っています。でも、うまくいったことを褒めてもらいたい、また、うまくいった要因をシェアする、そうした動機がカウンセラーを成長させることは、もちろんです。でも、今回は、自慢話ではなく、失敗談でもない、助けられた話を書こうと思います。

30 数年も児童相談所を始めとする福祉現場で働いていたら、いやが上でもベテランです。ベテランで良いこともあります。良いとは相談において武器になるということです。たとえば、不登校の子どもさんを抱える親御さんに対して、「長年、いろんなタイプの子どもや親御さんの悩みを聞いてきました。その中には、不登校のお子さんも沢山おられました。」というアナウンスは、ずい

ぶんと安心感を与えるように思います。このアナウンスには、私がクライアントにお会いしてうまくいったかどうかや、そもそもうまくいくとはどういう事なのかの話は含まれておりません。つまり話に嘘はありません。私はベテランであるという事実だけ述べてます。でも、ベテランというだけで、安心される側面はあります。安心は、希望を形作る一要素だと考えます。何かしらの希望、漠然としたものであっても、それがあかなしかなによって、ケース運びは違ってきます。「希望なきところに解決はなし」これは、フィンランドの解決志向の精神科医ベン・ファーマンが言ってました。言っていたような、たぶん。(因みにベンさんのワークショップには、彼が来日されたいぶ昔に参加したことがあります。面白かった。)

これは、心理士としてはベテランである私が、スクールカウンセラーとして働き始めた初年度の話です。先程はベテランである事のメリットを話しましたが、新しい場所では、それが脚を引っ張ることもあります。ベテランであろうと、誰であろうと、初めての現場は初めてのものなのです。分からないことだらけです。「長年、心理士をしてきましたが、スクールカウンセラーは初めてでわからないことだらけです」これは、正直で良い反面、あんまり言い過ぎると、ベテランなのに使いにくい人になってしまう危険性もはらんでいます。それでも学校サイドは、まあ、そんなものだろうと思ってくれたりするのでしょうか(校長や先生方にインタビューしたわけでは、ありませんのでホントのことはわかりません)しかし、実際のクライアントである子どもたちや、

親御さんには、そういう説明は通りにくい。「ベテランなのに新人？大丈夫この人」なんて、親御さんに余計な不安を与える可能性もある。子どもたちにとっては、ベテランの意味を伝えても、「ああ、お年寄り」ぐらいの理解かもしれません。

最初は、小学校勤務でした。スクールカウンセラーとしては初めての勤務です。緊張と不安、それと同等のワクワク感を持ちながらの通勤開始です。児童相談所であれば、基本チームで動きます。また、療育手帳判定などは、何ヶ月も前から予約が入ります。児童相談所で管理職となったキャリア終盤の仕事運びも、一応、会議だ、協議だ、ご挨拶だという感じで1日のスケジュールが事前に決まっていた。ところが、とにかく予定が立たない。引き継ぎのケースは伝えられていましたが、これは予定であって確定ではありません。前任のスクールカウンセラーから継続の意向を伝えられていたケースも、新学年になり、親が様子を見たいと言い出したり、一旦カウンセリングは終わりにしたいと申し出られたりケースばかりとなりました。とにかく、待つ、待つ、待つの1ヶ月です。その間、私はと言えば、学校という環境が物珍しく、頼まれもしないのに、一人授業参観をして過ごしておりました。

さすがに、焦りを感じ始めました。公務員を少しだけ早く退職し、基本大学に席を置きながらの臨床現場としてのスクールカウンセラーです。本務の大学教員という環境も2年目を迎えていました。新しいことだらけの環境で、大学教員と新しく始めたスクールカウンセラーという業務のトータル

とした疲れが出始めた頃です。今思うと、軽い五月病だったのでしょうか。「これから、どうする、いや、どうなる」なんてぼおっと考えながら、プレイルームのソファに腰掛けておりました。そこに現れたのが、A ちゃんでした。空き教室を利用したお世辞にもきちんとしたプレイルームとは言えない部屋の戸口から女の子がのぞいています。私が「どうしたの？」と声をかけると、「ここで遊んでたん」と言います。最初は何のことかわからずにいいましたが、彼女のたどたどしい説明をつなぎ合わせると、どうやら前任のカウンセラーのケースだということがわかりました。彼女のことは、引継ぎのリストにはあがっていましたが、担任の先生とは新年度になって様子を見てから声をかけるという事になっておりました。自分からカウンセラーに声をかけてくる子は皆無でしたので、私としてはちょっとビックリでした。A ちゃんは懐かしそうに部屋に入ってきて、棚の玩具などに手を伸ばします。「これ、面白いで」と手に取りながらカウンセラーである私に説明してくれます。A ちゃんの第1印象は、ちびまる子とじゃりン子チエを足して2で割ったようなこてこて感を漂わせた子どもでした。ほんとに楽しそうだったので、思わず「そうか。じゃあ、また来る？」と誘ってしまいました。「ええで」と了承してくれ、プレイセラピー再開の運びとなりました。担任とカウンセラーである私が話し合い、正式にA ちゃんは私のクライアントとして面接に来ることになりました。詳細は省きますが、以前家庭でのA ちゃんとA ちゃんの兄の養育に問題がありました。児童相談所も入って保護者と話し

合い、一応落ち着きました。その際、スクールカウンセラーとの面接が見守りの一部となったようです。児相によれば、問題となっていた養育者である祖母と兄の関係は随分落ち着いているようで、A ちゃんもとぼちりを受けることはないところまで来ているとのこと。でも、小学校が把握しているのはそこまでで、A ちゃんの家細かい背景や、出ていったA ちゃんの実母のその後などはわかっていないようでした。祖母も仕事をしており多忙を理由に学校との面談も渋りがちな様子でした。

そして2回目の面接にA ちゃんがやってきたときのことです。A ちゃんと私が定期的に面接する理由など、私なりに、かみ砕いて話しました。A ちゃんに問題があってという事ではないことを伝えたい気持ちが強くありました。複雑かもしれないけれどもA ちゃんの口から家族の紹介をしてもらおうと思い、黒板と一緒にジェノグラムを描くことを提案しますと、「ええで」とすんなり了承。と言うか、非常に積極的に説明してくれたのです。

「うちには、お母さんは居てるけど、ほんとお母さんじゃなくて、お祖母ちゃんやねん。お母さん言うけどな。ほんとお母さんは、ママ言うて、時々、弟連れて帰るよ。ほんでな...。」

クリアに自分の家庭状況を述べるA ちゃんと、見た目幼く、鼻さえたらし気味のA ちゃんのギャップに暫し唖然となったのを今でもはっきり記憶しています。A ちゃんにすれば、それは日常であり、A ちゃんの家族のリアルなのですが、自分の家族の複雑さを客観的に淡々と語る小学校2年女子に、

健気さ、強さを感じました。そして正直、この子に比べれば、自身の五月病の軽いのなんて、たいしたことないよなど、得心したのです。興味深いのは、Aちゃんが家族について雄弁に語ったのは、その1回こっきりでした。それから以降は聞いてもあまり話したがらなかったように思います。

スクールカウンセラーをやり始める以前のケースとして出会った人たち、またスクールカウンセラーとして今も出会い続けている人たちから、勇気づけられることは多々あります。しかし、あの日のあの時のAちゃんから受けたインパクトと「助けられた」という感覚は、今も別物です。

※文中の事例については、プライバシー保護のため、事実関係は大きく改変しております。